

会報  
**峠** とうげ  
 河井継之助記念館  
 友の会会報  
 第12号  
 2012.11  
 編集・発行  
 河井継之助記念館  
 新潟県長岡市長町1丁目1675-1  
 〒940-0053  
 Tel.0258-30-1525  
 Fax.0258-30-1526  
 頒布価：50円(送料別)



## 西近江路を訪ねて

友の会会長 下田 邦夫

昭和四十六年司馬遼太郎は『週刊朝日』に「街道をゆく」の連載をはじめた、その記念すべき第一回の舞台上に近江「湖西のみち」を選んでいる。巻頭、司馬遼太郎は語っている。近江という淡淡とした国名を口ずさんだだけで、もう私には詩が始まっているほどこの国が好きである。近江は文化財の宝庫、重要文化財件数は全国第三位、しかもほとんどがその土地の人々により大切に守られている。それは近江の歴史・文化の奥深さと生活の根強さを物語っているのではない。

私事ではあるが、今年七月二十八日滋賀県の湖西地方を訪れる機会があった。目的は現在の高島市安曇川(旧小川村)の中江藤樹記念館と藤樹書院を訪ねるためだ。三年前にも訪れており今回は二回目である。JR湖西線安曇川駅から約二十分位のところに藤樹神社

があり参拝する。隣接する中江藤樹記念館を訪問、高島藤樹会会長であり記念館の顧問の上田藤市郎氏に、越後長岡の河井継之助記念館から来たことを申し上げ、館内を見学させて貰う。中江藤樹先生の書跡、遺品、関係文書等あり、とりわけ「致良知」の三文字の掛軸が目に入り拝見する。

中江藤樹が亡くなってから三六四年。近江聖人と言われ、三十七歳の時「陽明全書」を手に入れ学び、王陽明の思想に共感し、自らの学問を築いたことにより、日本の陽明学の祖とされた。近くにある藤樹書院を訪ね、管理人さんよりご案内いただく。

最初の書院は明治十三年に焼失したが、藤樹先生を慕う村人たちが中心になり、明治十五年に同じ場所、同じ間取りで再建した。名前のいわれの「藤の樹」はすでにな

く、新しい藤の樹が植樹されていた。書院・講堂正面には藤樹先生、久子夫人、三男常省先生の位牌があり、おまいりをし、管理人さんより儒教の位牌について説明を受ける。今でも一月十一日の読書始めで「孝経」が参列者全員で拝誦され、三月の立志祭、九月の儒式祭典が厳かに執り行われている。

中江藤樹の教えは、「良知に致る」は貌・言・視・聴・思の五事を正す事で、五事とは「なごやかな顔つきをし、思いやりのある言葉で話しかけ、澄んだ眼で物事を見つめ、耳を傾け他人の話を聞き、

真心をもって相手を思う」という事。そのような五事を普段の生活の中で、心本体の働きと行動ができれば「良知に致る」事であり、明德であり、愛敬の心であると説かれた。また、藤樹自身も自らを省みて心を慎しむ日々を重ねられ、この講堂で門人達や村人に教えられた。

山田方谷・佐久間象山が学んだ昌平齋の佐藤一齋が文政四年(一八二二)藤樹の学徳を慕って書院を訪ねている。「王陽明の学」とか「良知の学」とかいつても藤樹が亡くなってから一七〇年前の過去の人



藤樹書院 正門

物であっても一齋は、この時金一封と「秋、湖西小川村を過ぎて藤樹書院に詣り」と題して詩を作った。「碩人已みぬ、幾星霜。景慕し今顔す、徳本堂。遺愛の藤棚、荒れて益々古く。孤標の松幹、老いて愈々蒼し……」この頃は藤樹の遺徳が生きており村人達は礼儀正しく謙譲の気持ちで厚いので、人に問わなくても、藤樹の故郷である事が判るほどであった。

## 峠抄

●とうげしゅう ①

「長岡の夏は暑いですね」よくお客様が汗を拭きつつ話される。夏、私達河井継之助記念館職員の日課の一つに庭の水撒きがあるが、松二本と昨年新しく庭に植えられたもみじ達はまだまだ若く、この夏は暑さに負けてしまわないかと気が気ではなかった。そんな気をもんでいた朝夕の作業が、秋になった今となっては、私達の大きな癒しだったと気づく。

松は日本では長寿を表す縁起のよい木だが、継之助が植物の中でも松を好み、自分の雅号を庭の松にちなんで「蒼龍」とした話は周知の通りである。また『塵壺』の中で彼が旅先でよく松について記しているのも印象的だ。そこからは彼の松への愛着とともに、生家の庭への、故郷長岡への想いを強く感じる。松に寄り添うもみじが色づき始めた。長岡の長い残暑が過ぎ、もうすぐ厳しい冬が訪れる。暖かくにぎやかな町を知りながら、それでも継之助はこの長岡の風土を強く愛したのだと、短い秋を感じつつ思った。

(布川)



書院には私以外、他に見学者も無く、中江藤樹の坐像と自分一人しばらく講堂に正座していた。藤樹先生が人間として生きるべき真実と誠の道を求めて自ら実践し熱い思いで人々に語りかけてきた言葉の数々。今もそんな息づかいが少しではあるが感じられるような時間でもあった。

高島を後に、琵琶湖を右手に眺めながら近江今津に向かった。幕末の政局の中心は京都であり、日本の歴史が大きく変わるうとして大きなうねりが来ていた。

安政年間には京都の大火、安政の大地震、将軍の継嗣問題、安政五年には幕府が朝廷に無断で「日米修好通商条約」の締結、戊午の密勅、大老井伊直弼を頂点とする幕閣による尊王派の弾圧、いわゆる安政の大獄であり、安政七年三月三日「桜田門外の変」等天災や事

件が多く、人々は世の中が不安に怯えた時期でもあった。

旅日記「塵壺」によれば、河井継之助は万延元年（一八六〇）西国遊歴の途中、湖西地方を旅している。閏三月二十三日は近江今津、二十四日に衣川（現大津市）、大津に宿泊し、その後京都に戻っている。継之助は名所、旧跡を訪ねたのか、何の目的で、足を延ばしたのかはわからない。時代の急速な移り変わりを現実的に足を使い、肌で感じ、長岡藩をどの様にすべきか行く末を案じたのではないか。

近江今津は、大津から敦賀までの北国街道の宿場町で栄えたところで、今でも古いまち並みが残っている。夏の日差しが雄大な湖西を照らしている。「遠く昔から神を齋く島と呼ばれる竹生島」がはつきりと見える。今津は竹生島への船の乗り場でもあった。継之助も時代こそ違いきつとこの景色を見たに違いない。

今津に小さな蔵元がある事を聞き訪問する。それは池本酒造さんである。十五代将軍徳川慶喜公が京都に行かれる時、池本酒造の井戸水を飲まれ、また「御膳水」として用いられたとの事。突然の訪問でしたが長岡から来たと告げ、女将さんにお会いして井戸水を一杯いただけないかお願いしたが、今は夏場で飲めないので麦茶を御馳走にな

った。しばらく女将さんとお話をし、地元の方が来られたので話しこむ。池本酒造さんは比較的新しい蔵元で、こんこんとわきあがる水を使つて、仕込み水ほか洗瓶にも使つているとの事。帰り際、蔵元の「琵琶の長寿」を買って求めた。

陽も落ち始めたので、若狭街道を走り、安曇川中流治いの旧朽木村を通った。まだ古い集落が点在し歴史を感じさせる。若狭から京都迄、俗にいう鯖街道である。その昔若狭でとれた鯖に一昼夜塩で締めた鯖は京都に着く頃にはほどよい味になっていたと言われ、道路沿

いには、多くの鯖寿司の看板とお店が並んでいて、観光ルートになっている。かねて調べておいた「花ひさ」で今晚の夕飯にと焼き鯖寿司を購入、今夜の宿である草津まで戻った。

最後に河井継之助記念館もまもなく開館六周年になろうとしていいる。日頃友の会の活動にご尽力を載っている事に感謝を申し上げます。今後とも会員の皆様よりのご意見を頂きながら運営をしてまいります。

※参考文献「物語中江藤樹松下亀太郎著 テーブルレットの柳屋シイティ代表取締役会長

## 河井継之助はどういう人物？

その⑩ 義と利を同時に

連載

改革は勇敢にやるものである。継之助の藩政改革をみると、綿密な調査と情報集めを行ったのちに、大胆に、しかも迅速に断行している。

幕末の長岡藩政改革は破綻してしまっている藩財政をいかに立て直すかにかかっていた。貢租などの収入の何倍もの藩債を、いかに借主に返済するかにかかっていた。勿論、不可能な数字が藩改者の壁となっていた。

河井継之助が主君牧野忠恭に抜

規律がある。それを改革の目的のために簡単に捨て去った河井継之助は勇敢であった。

「経才が忠義につながる」としたところに発想の転換があったのだ。ただ、継之助は経才とはいわず「経理」といった。理は本質であり、また道義でもある。ちよこざいな才覚だけでは世を直すことはできないとしたところに、継之助の革命児らしきところがみえるのである。

継之助はいう。「金儲けが、自分（自藩）だけのものではならない」また、「社会のため、人類のためのものでなくてはならない」と。越後の一介の改革者の主張であった。その内容は、難渋している者たちを救済する。天災地変を予測し、対策を講ずる。資金を融通し、商業・交易を活発にする。産業を振興し課税を撤廃し、自由闊達な地域社会を創る。舟運、水路の開発を積極的に行い、生産物の販売を促進するなど、およそ儉約だけを改革の第一目標にかけていた政務者に真向うから挑戦をしかけたのだ。これを勇敢な改革といわなくてはならない。

継之助の学問の師であった備中松山藩儒山田方谷は、遊学を終えて帰る継之助に「義と利の片方が欠けてもいけない」と説いたとある。金儲けも、民政を担当する武

# 致良知

中江藤樹書 致良知 (藤樹書院蔵)



士の義であるとしたところに継之助の大胆な実践があった。

当然、義には士気の作興が不可欠だ。造士寮を作り、教育改革を推しすすめようとしたのは、武士の常道を学ぶことだとした狙いがある。その義のもとに人材を集めれば、美しく理知的な集団となる。彼

## 「塵壺」を読む

10 連載

いよいよ名所の多い京都についたからには、さぞかし目一杯書くことがあるだろう、と思いきや、

多めの文章は六月末日の初日はかりで、七月頭にかけては、ほとんど日付と天気の記事しかない。このことについて、郷土史家の今泉鐸次郎は、『塵壺』に、京都での見物箇所の記事がないことを、次のように註書している。

「継之助の京都滞在は五日間、大坂滞在中も亦五日間で其間各方面を遊覧視察し、又旧知新知にも逢つて談論したのであると思ふ。然るに両地滞在中の事に就ては、全然、記述する所がない。是は記述すべきことの無いのではなくて、むしろ多過ぎるので、記述の煩に堪えずして、追て別に記述する考から、之を欠たものではなからうかと思ふ。」

らが公平に民政を行えば、必ずや、多額の藩債は霧消すると策をたてたのだ。

継之助が多く歴史書を読んだのも、そこに大きな目的があった。先人に学べば、義と利の同時達成がみえてくる。  
(稲川)

その一方で、両親宛の書状には、京都での行き先が、事細かにつづられている。

「西山にて妙心寺、御室、龍安寺、等持院」等持院では歴代足利十五代將軍の木像をみている。三休の將軍像の首が、尊王攘夷の浪士に打ち落とされ、鴨川の河原にさらされる、「足利三代木像梟首事件」が起ころるのはこのちのことである。

「金閣寺、北野天満宮、今宮神社、紫野、上賀茂、下賀茂社御所、二条城は申す迄もなく、南禅寺、青蓮院宮、知恩院、祇園、清水、大谷、高台寺、方広寺の大仏、日吉神社、智積院、枳殻、西本願寺、島原、仏光寺、興正寺、東寺、六波羅等々」と実に三十近い箇所を見物したとある。かつて父親が京都に居て、父親は京都の継之助の記述を楽しみに待ってい

るであろう、ということを意識して書いたのであろうか。その日の記述は「歴覽仕候、実に何を見候ても、尊前様思出候儀に御座候」と締めであり、父親も目にした名所・社寺をみていると、父親の感動を、自分も共有出来るようだとともによめるし、その度に父親のことを思い出してホームシックになっているとも読めるだろうか。

さて、七月四日に、京を立ち、途中佐藤継信・忠信の墓に参り、泉涌寺、東福寺、諸々の神社、桃山御殿跡や萬福寺、平等院を見学した。

東山区にある泉涌寺では、門前の長い道のりに疲れたのか、不満を漏らしている。しかし山門に掲げられた、唐の書家、張即之の額を見て一転、上機嫌になったらしい。このような額を「扁額」というが、室内や門戸にかける表札のようなもので、主に、建物の名称・場所の由来・精神などを記す役割がある。現在でも、全国の寺院の拝殿の上、本堂の上部などを見上げれば、目にする事ができる。

黄檗宗総本山で有名な万福寺でも、「聯額には関心のものなり」とあり、額がお気に召したらしい。「河井は、字を読むのではない、字を掘るのだ」と言う逸話も残っていることから、文字の彫られた額に関心が高かったのかもしれない。

れない。ちなみにここだけでなく、各地の名所に額があれば目に留め、そこに書かれた言葉や感想を「塵壺」に残している。

平等院のある宇治から伏見を船で下り、さらに伏見から夜船に乗って大坂へ向った。伏見は大坂と京を結ぶ、水上交通の要である。朝の六ツ半(午前七時)に到着し、まず大坂城を見学した。その後、中之島にある長岡藩の蔵屋敷に行つた。ここで多藤太という人物が登場する。彼は、大坂見学の案内役となり、四天王寺などを見物したらしい。これも両親への手紙から組み取れる内容で、残念ながら、『塵壺』には、大坂の記述はほとんどない。「終日見物」といった風に、短く済まされている。おそらく船場などの商家街をまわり、商取引などの仕組みを探索したのでだろう。

夜は、天神橋と難波橋の間の「竹式」という宿に泊っている。翌日の文章では、「不親切なる宿のため、洗濯も出来ず」とあるので不満だったようだ。

また、中之島にある、長岡藩の蔵屋敷にも泊まっている。ここは現在の福島一丁目・二丁目、ほたるまち再開発地区である。大坂は全国の物資が集まる集散地であり、越後十一藩のなかで、大坂に蔵屋敷を持っていたのは長岡藩だ

けであった。領地内の生産物を北前船で運び、大坂商人に渡していたのである。彼の師、山田方谷も、松山藩の負債整理のため、大坂蔵屋敷の廃止と、大坂商人への借金返済延期願ひ、返済計画の策定を行っていた。藩財政を正常化し豊かにするには、物流のなかめ・大坂に着目する必要がある、という視点をもち継之助には、ふたつまなこで見た大坂の経験は、大いに役だったに違いない。

伊丹では、酒屋に着目している。「劍菱はじめ、大家あり」とし、「千石、二千石」と酒の原料の米の、取扱う規模が大きいことに感心している。しかし、「灘には及ばず」であったらしい。この二日目に、その灘にも立ち寄り、「酒屋の多くして大なる」と樽木を積めると夥しきものなり」とある。さらに、こちらでは酒造のための、米つき水車の家の大群を目の前にして「大相なものなり」と感心している。継之助は、各地でいま盛況な商売はどのような業務形態を取っているのか、平たくいえばどうすれば懐を富ます事が出来るか、に高い関心があつたと思われる。このような物流や産業への関心が、藩庫を豊かにする方法を探る上で、大いに役だったに違いない。

※参考文献「決定版 河井継之助」稲川明雄著

(高柳)



# 『峠』の越後長岡を歩く ⑨ 番外編

連載

司馬遼太郎の『峠』に描かれている「越後長岡の風景を現在に訪ねるシリーズ」。今回は番外編として小千谷市の慈眼寺を歩いてみました。

●『峠』下巻・新潮文庫260ページより

官軍本営にゆくのかとおもえば、使者はちがうという。

「寺でいながら」といった。慈眼寺と云った。

小千谷の慈眼寺といえは、このあたりでは知られた禅宗の古刹である。しかし本営を会談の会場にせず、なぜそういう寺がえらばれたのか、継之助も多少不審をもった。

町のなかの道をゆく。やがて山門が見えた。

『峠』に「古刹」（由緒ある歴史の古い寺）と書かれた、慈眼寺は、小千谷市でも屈指の古いお寺です。寺伝によれば、七世紀の開基、といわれています。

しかし、この場所が有名になったのは、むしろ戊辰戦争の会見、いわゆる小千谷談判が行われたことによるものでしょう。慶応四年五月二日、長岡藩家老、河井継之助が藩主の歎願書を持参し、小千谷に本陣を置いた薩摩と長州を中心とした新政府軍（西軍）の軍監、岩村精一郎と講和談判を行なった場所、それが慈眼寺の会見の間です。この談判不調の後、北越



慈眼寺



戊辰戦争はまぬがれ得ないものとなり、両軍は戦火へと突き進むこととなります。現在、小千谷市平成にある慈眼寺は、町の中にあります。狭い道をたどっていくと、貫録のある山門が出現し、目を驚かせます。山門の風雨にさらされて白くなった様子が、歴史の重みと存在感を主張するようです。一歩門をくぐれば、スギ木立に囲まれた静かな境内には、現在幼稚園ができています。墓石と遊具

が渾然一体となった境内では、時折園児の歓声が聞こえます。境内正面には、船岡観音を祀る観音堂があります。この本尊、聖観世音御菩薩は、弘法大師が彫刻したものと伝えられています。観音堂を左手に曲がると、慈眼寺本堂です。言わずと知れた会見の間は、この建物の一角に存在します。お香の薫る本堂に足を踏み入れると、当時の軍服や砲弾、戦闘絵図など関係遺品が展示されています。単にこの場所が古くからの寺院であるというだけでなく、歴史の一舞台であったことを印象づけます。さらに廊下を進むと、その右奥に、ひっそりと会見の間があります。

今回は大阪からお越しの土屋貴博さんにお話を伺いました。●来館のきっかけは 休暇を利用して新潟方面にきました。山本五十六記念館に立ち寄った時、近くに河井継之助記念館もあると聞いて訪れました。私が初めて河井継之助を知ったのは、中学時代の先生に薦められて読んだ司馬遼太郎の『峠』でした。その時先生が言われたのは「長岡では継之助に対しての評価は二分している」でしたが、当時は長編小



土屋貴博さん (26歳)

平成24年9月28日

## 遠方からの客人

●インタビュー⑩今でも評価は二分していますか

説を読み切ったぞという程度であり人物を深く考えるということもなく、継之助のことはスケールの大きな人とか男らしい人、そんな印象を持っただけでした。

●館内を見ての感想は

一階展示室に『峠』の直筆原稿が飾られていました。地元大阪に居て気になりながらも司馬遼太郎記念館にはまだ足を運んだことがありません。長岡で見ることができるとは思っていなかったのが感激しました。他にも展示しているパネルなどを見て、今まで漠然としていた継之助像がよりはっきりと解った気がします。また、展示品の中に継之助愛用の日の丸の軍扇や書などがありましたがそれらの品々を見ていると読んだ小説が現実味を増し「なぜ！他に身を立てる方法はなかったのか」と考えてしまいました。

（インタビュー／西川）

河井継之助記念館にも、この会見の間を大きく引き延ばした写真パネルがあります。足元には、継之助が差し出したと言われる歎願書の文章が引用されています。しばしばガイドボランティアの方がこの前で、小千谷談判から北越戊辰戦争に至る経緯を、話されている様子が見うけられます。この会見の間を含む本堂は、平成十六年十月の新潟県中越地震に

より、全壊しました。しかし多くの寄付などにより、平成十八年九月に復旧しました。したがって、会見の間は当時の面影そのまま、というわけにはいきませんが、継之助の談判にける思いや、会見の間の復旧したいという人々の思いの重みを、感じることでできる空間となっています。（高柳）

※参考『新潟県の歴史散歩』

新潟県の歴史散歩編集委員会



# 藩政改革 ● パネル紹介



河井継之助というと、ガトリン  
グ砲や北越戊辰戦争をイメージす  
る人が多いと思われる。しかし、彼  
が行った業績で忘れてならないの  
は、長岡藩の多額の負債を立て直  
し、わずか三年で黒字に変える等  
の画期的な藩政改革を行ったこと  
であるといわれている。実際、彼の  
業績を知ろうという目的で、政治  
や経済を学んでいる学生や、若いサ  
ラリーマン、または企業の経営者な  
どが来館されることも少なくない。  
また改革は、陽明学や山田方谷  
の教えをもとに実行されたとい  
うことも重要である。根底には、大  
数をしめる農民や町民、商人等が  
豊かに暮らせることが、藩、ひいて  
は国を安定させるものだという理  
念があつてこそその改革なのである。  
このパネルには、彼が行った注目す  
べき改革が図やグラフなどと共に  
端的に表されている。

激しい動乱が押し  
寄せようとしている  
幕末の慶応元年（一八  
六五）十月、第十一代  
藩主牧野忠恭が継之  
助を信任し、郡奉行  
に抜擢したことから長岡藩の慶応  
改革は始まる。継之助は、長岡藩  
では異例の昇進をし、ついには家老  
までのぼりつめ、その間、次々と新  
しい施策を実行していく。パネルで  
は次のことをあげて説明している。

- ・軍制改革と禄高改正を行う
- ・賄賂の慣習をやめさせる
- ・贅沢を一掃する
- ・免税制度の不正をやめさせる
- ・河税を廃止する
- ・造土寮を創設する
- ・賭博を禁止する
- ・遊郭を廃止する

この中の一つ禄高の改正について  
あげてみる。禄高改正は慶応四年  
（一八六八）三月一日に発表され  
た。改革の中でも一番評価が高いと  
いわれている。改正は藩士の禄高を  
百石に平準化しようというもので  
あり、上を削り、下を増やすやり

方だが、極端な改正でなく段階的  
であつたという。河井継之助のもと  
で、勘定頭と郡奉行をつとめていた  
村松忠治右衛門が、七十歳に達し  
た明治二十一年（一八八八）に書き  
綴った手記『思出草』の中の一文が  
パネルに載っている。改革に対する  
継之助の思いを知ることができる。

「百人の禄を減じて、千人の禄を  
増し、人氣を調和して力を強くす  
る」このように継之助は人心の一致  
をはかり、富国強兵の長岡藩がで  
きると考えたのである。

また、パネルには財政の移り変  
わりを棒グラフにして表しており、  
その劇的な変化がひと目でわか  
る。長岡藩は一年間でおよそ五万兩  
の財源が必要だつたというが、嘉永  
二年（一八四九）にはなんと五年分  
にも相当する二十三万兩、元治元  
年（一八六四）には十四万兩もの借  
財があつた。そこを、納税や節約の  
みならず、産業の振興をしたり、生  
産物の販売促進や流通をはかった  
り、京阪に持ち込んでの商取引や  
運用をしたりなど、積極的な改革  
により多額の利益をあげていく。つ  
いに改革二年目の慶応三年（一八六  
七）には九万九千兩、翌年の六月に  
は十一万兩の剰余金が出るまでと  
なつたという。しかし時代は戊辰戦  
争のさなかであり長岡藩もまた戦  
争に巻き込まれていくのである。

さらに、このパネルには、農耕作

業図（片山翠谷・画）、博奕打（小  
川当知・画）、雪之図（飯島文常・  
画）などの絵も散りばめられてお  
り、長岡藩の当時の暮らしぶりを  
推察することができる。継之助は  
このような領民の暮らしを頭に入  
れて改革をすすめたといわれてい  
る。改革の際の継之助の興味深い  
逸話や、妹・安子の話もこのパネル  
に書かれており、継之助の人間性  
を知ることができるのも、このパネ  
ルの見所である。

改革に至るまで決して平坦な道  
のりではなく苦難も多かったが、常  
に世の中に目を向け、強い理念を  
持ち、領民の現状を知って、領民の  
ために改革を断行した継之助。現  
代社会にも通じるヒントもあるの  
ではないだろうか。（神保）

※参考文献「決定版河井継之助 稲川明雄著

●記念館オリジナルポストカード販売中!  
(5枚組、パッケージ付300円)郵送も承ります。

おしらせばん

- 司馬遼太郎著『峠』を読む会  
毎月第3月曜日 午後6時30分～8時
- 河井継之助旅日記『塵壺』を読み解く会  
毎週土曜日 午後1時～3時
- 今泉鐸次郎著『河井継之助傳』を読む会  
第2・4月曜日 午後1時～3時
- 楽しい詩吟教室:第1・3月曜日 午前10時～11時30分  
詳細は記念館へお問い合わせください。

河井継之助記念館開館6周年記念講演会のご案内

日時/12月22日(土)13:30開場14:00開演(15:30終了予定)  
会場/長岡グランドホテル 悠久の間(東坂之上1-2-1)  
講師/木村幸比古氏(京都・霊山歴史館)  
演題/八重の実像(25年度NHKドラマ「新島八重」の生涯をたどる)  
定員/300名

## 記念館日誌 ● 某月某日

八月の暑い日、ひとりの外国人の  
若い男性が来館されました。受付  
で、緊張しながらカタコトの英語で  
スタンブラリーの説明をし、「Can  
you speak Japanese?」と聞こうと  
しました。

考えてみたら、英訳のない当館に  
来館されるということは、当然、日  
本語が読めるということに気づ  
き、思慮のなさに思わず赤面して  
しまいました。サービス精神旺盛  
な方で、「Your English is very  
good!」と御世辞まで言ってお下  
り、ますます、赤面した次第です。  
その方が帰られた後、芳名録をみ  
ると、「ありがとう」の一言が……。  
こちらこそ、感謝です。（星野）



記念館設立当初の第一番目の募集からガイドボランティアに携われ、友の会の理事としても活躍。高木さんのガイドはなんといっても親切丁寧ということで評判だ。勤労青少年ホームなどで書道の先生もしておられる高木さんに継之助との出会いなどを聞かせていただいた。

## 教え、そして伝える 高木春夫さん 七十九歳



笑顔の高木さん（勤労青少年ホームにて）

### ガイドを通して継之助を思う

河井継之助記念館が開館するずっと前、今から45年ほど前に近くにあった郵便局の宿舎にお住まいだったという高木さん。まだ河井継之助記念館の建物はなく、石垣もあつて、そのころなら「蒼龍の松」もあつたのでは、と昔を懐かしそうに話された。「ガイドボランティアの募集があつて、それに参加したら稲川明雄館長のお話をいつでも聞ける！そう思って始めたのがきっかけなんです」ガイドボランティアを始める前の期待感を今も残しておられるような笑顔だ。さまざま

ご縁から河井継之助に関わっていただけることを感じる。

日頃、ガイドのときに一番熱が入る展示は小千谷談判のときに持参した歎願書とのこと。「河井さんは戦争をすべきでない、避けるべきだと考えておられた。だが薩長の偽攘夷論には腹を立てていた。河井さんはいろいろ旅をされて長崎でアヘン戦争のことを知った。清国が外国にあれば馬鹿にされたのだから、日本はそうならないように藩財政や軍備を整え、欧米の国に劣らぬ土台に立つた国にしたかったのだらうと思いません。歎願書にはそんな河井さんの

真意が表れていると、おいでになつた方にはお伝えしていますよ」さまざまな地を歩き、人に会い、見てきた河井継之助だからこそそう考えたのだらうと高木さんは言葉を噛み締めながら、選びながら続ける。「当時は田植えの時期だった。そんな時期に乱を起し、農民を苦しめるなんて避けなければならぬ」と書いてありますね。ですが西軍につけば会津攻めの最先端に立たなければならず、戦争はやむをえなかつたという河井さんの気持ちを考えちゃいま

「継之助はなぜ戦争に向かつたのか、やはりそこが河井継之助記念館のガイドの難しいところであり、大切なところだと感じた。」

「河井さんが明治維新まで生きのびておられたら日本は変わった方向に向かつたと思います。明治新政府の要員に三島中洲が入つたし、河井さんは商才があつたからその面でも活躍されたらうな」長岡の偉人としての継之助について、そう感想を述べる高木さんだが、そのあと。「ここにおいでになつた年配の方には、河井さんは奥さんを大切にしなかつたからNHKの大河ドラマの主役になれず、直江兼統が先になつた。奥さんを大切にしなければならぬ」ということをお伝えしていますよ」そんなユーモアでガイドに花を咲かせるそう。これを言うと女性は大喜ぶんですと笑

つてガイドのツボを教えてください。人を楽しませる。ガイドをやる上で一番大切なことかもしれない。

### 書から見る継之助像

ガイドボランティア以外にもJR長岡駅すぐ近くの勤労青少年ホームで書道の先生をしておられる高木さん。書に携るようになったきっかけは、意外にも上司が書家だったから、とのこと。仕事で書いた文書の文ではなく字を直されたというのが、書にのめり込むきっかけだったというユニークさに微笑んでしまう。

「継之助傳にあるように河井さんは中国の唐の時代の歐陽詢や褚遂良の法帖を非常に勉強されている。私は墨液でも書くが、河井さんは墨を磨って心を静めて、落ち着いた雰囲気の中で書かれたことが継之助傳の中でも書かれていて感じます。それに手紙や塵壺を見させていただと、くずしが非常に正確なんです。継之助傳だったか、河井さんは字が下手だとい

か、河井さんは字が下手だとい記述があるが、そんなことはないですね。塵壺は旅の途中なかかわらず、正確なくずしで書かれているので、現代でも読むことができる。あれだけきれいな草書体で書かれ崩しが正確なのは、完全に覚えていたからですね。手がおぼえるということはあるが、どれくらい鍛錬したか計り知れない。また、書は

体を表すと言いますが、几帳面な性格だったのではないのでしょうか。「李忠定公集」などあれだけの書物もくずさず、我流を出すことなく乱れなく写すには大変な忍耐力が必要でしょう。情熱を感じます」書については記念館に来た多くのお客様が感心しているが、高木さんはその書がなぜ素晴らしいか理論的に教えてくれる。

「馬術などでは走るのと止まることさえできればよい。と作法などどうでもよいとしたと言われていたが、書については作法も十分勉強されて、漢詩や中国の古典などにも造詣が深く尊敬いたしますね」同じく書に親しむ高木さんだからこそ、継之助を深く理解している。そう感じた。

高木さんの一番好きな河井継之助の書は「忍可以支百勇一静可以制百動」高木さんは継之助について多面的に理解し、長岡という地でさまざまな立場で人に伝え、教えている。高木さんの優しい人柄を通して継之助に触れることは、新たな継之助像を見るようで新鮮だ。継之助自身がそれを喜んでい

るのだらうと思えてならない。

（インタビューと写真 布川）

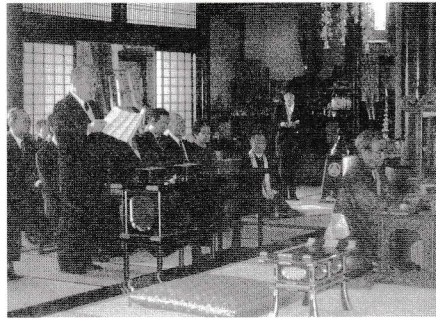
高木春夫（たかき はるお）プロフィール  
昭和9年（1934）長岡市関原生まれ、平成10年長岡東神田郵便局退職後、長岡市中央公民館で生徒学習「フォニクスター」をしていた関係で勤労青少年ホームや中央公民館で書道の講師。平成19年から河井継之助記念館ガイドボランティアに従事。



### 河井継之助没後百四十五年祭法要

十月七日、河井継之助の没後百四十五年祭法要が墓所のある栄涼寺で営まれた。法要は当会が主催し今年で三回目。祭壇の前には継之助の肖像画が掲げられ、当会会長の下田邦夫さんが祭文を読まれた。続いて長岡藩牧野家十七代当主の牧野忠昌さんより挨拶があった。本堂にしめやかに読経が流れる中、県内外から七十名余りの参列者が焼香し、継之助の遺徳を偲んだ。また遺族を代表して河井恵美さんが法要の御礼と継之助の行った事が見直されつつあることに感謝を述べられた。

その後、市民の集い(昼食会)が河井継之助末裔の七代目正安夫



栄涼寺での法要

●「志」を伝えたい  
「河井継之助の名は決して名告つてはならない」、直系の御子孫にずっと伝えられた言葉だという。また根岸鎌次郎(継之助の姉の子・日本郵船の最初のロンドン支店長)も、伊藤ら政府の高官達が、彼が長岡出身と解ると「河井を知っているか」と尋ねる。その際「知らない」とのみ答えていたそうである。「志」を持ちながらも、敗れたものの歴史は哀しい。継之助のゆかりの方々や出席された皆様の貴重なお話を聞き、今更ながら河井家の苦難の歴史を思い知らされた。時は移り、今は継之助の名や「志」を、胸を張って、どこでも語れる時代とな

った。長岡は、一度の戦争や地震の被害を受けながらも、その度に見事に復興してきた。こうした歴史や平和の尊さ、先人たちの「志」を、子供たちや未来に語り伝えていきたいと思う。最後に、遠方よりお越し頂いた河井家ゆかりの方々、河井継之助記念館及び友の会の事務局の方々に心から御礼を申し上げます。  
— 遠山典子(長岡市)

●法要に参加して  
敬愛する幕末の藩士「河井継之助」の一四五回忌法要にお参りする機会を得ました。牧野様はじめ直系の御親族や市民が大勢参列し、肅々と執り行われました。法要の途中から大雨とな

り、墓参は省略され、それが心残りでした。法要後の、直会「市民の集い」では私達詩吟の会で、河井継之助の漢詩、その他を吟詠させて頂きました。ゆかりの方々を前にして緊張のひと時でしたが、散会后、「感激しましたよ」「良かったですよ」のお声を頂いてほっとしました。漢詩はもとより、河井継之助の言葉の中にも、現在の政治家や官吏に是非心に留めて欲しいものがあります。先人の心を想い、法灯を守らねばと、心新たにしました。  
— 佐藤洋子(長岡市)

●法要に参加して  
今回初めて河井継之助法要に参加させていただきましたが、奇しくも没

## 会員の声

### 目

#### 「会員の声」大募集!

●記念館館長との出会い  
今も司馬遼太郎著「峠」の愛読者は、日本全国に多数のファンがいると思います。私も今から四十年前に会社の先輩から勧められたのが切っ掛け。河井継之助の陽明学思想「知行合一」で多大な長岡の藩政改革に着手実践したことを知り深く感銘。以後この本の影響に依り幕末維新関連の本を手当たり次第読み、映画、テレビ、観劇と趣味の範囲に拡大。平成二十年秋、記念館に立ち寄った際偶然にも稲川館長とお会いして、学識の広さと人柄に接しファンになりました。今や稲川明雄氏の書物を正直少し疲れますが読み続けています。最新刊「風と雲の武士」は小説風で楽しめました。なお来年のNHK大河ドラマ「八重の桜」

●常任戦場  
この「四文字」は長岡藩風として良く知られています。今日の言葉におきかえると危機管理に通じます。この度の未曾有の東日本大震災及び原発の災害はとも消防、警察力丈の支援では間に合いません。国を守る自衛隊の力を必要としました。天災は武器なき戦争です。これまで自衛隊を否定して来た言動があるとすればこの秋、厳に慎むべきだと思います。日常平凡で無事を守ることが如何に至難の業であることかと痛感させられました。  
— 三條和男(東京都武蔵村山市)

●曾祖母は嘉永三年生まれ  
私の曾祖母は嘉永三年(一八五〇)生まれ。継之助が妻がかと結婚した年です。同じ時代に生きていたことに驚きます。ひょっとしたら何処かで継之助夫妻と遭遇していたのかもしれない。十八歳の娘盛りの頃には、東西両軍の若い兵士達への恋慕と哀惜の情念に慟哭していたのかもしれない。途方も

ない勝手な妄想がどんどん膨らみません。遠い歴史の彼方にいた継之助が今よりも身近に思えてきます。歴史の織り成すミステリアスの世界に思いを馳せながら、継之助のこと郷土長岡のことなど少しでも学べたならと思えます。  
— 和田良栄(長岡市)

●羽後「あま龍」の衝撃  
河井継之助の生涯を記す書物の多くがなぜか必ずといってよいほど、長岡藩九代目藩主牧野忠精公と公の特技とする「あま龍」について触れている。一体継之助とどういう関係があるのかという疑問から出発して、二十年以上「あま龍」の虜となり、ようやく一段落した思いだった。ところが今春、ひょんなことから秋田角館の町に立派なあま龍が存在するのを知り、長岡の専売特許ではなくなったのである。  
— 中村健治(長岡市)

●「会員の声」大募集!  
原稿は二百字以内(題名、氏名は字数外)、事務局までお送りください。投稿を心よりお待ちしております。



●講演会報告

友の会総会、講演会が三月二十九日に開催された。当日はお天気に恵まれ、会場は七百人以上の来場者で満席となった。講師は、長岡の人物の著作も多い、作家の工藤美代子さんである。今回は「山本五十六の生涯と河井継之助」と題し、二人の共通点、小説の制作秘話等を披露していただいた。今回の講演会は、もともと昨年の十二月の予定だったが、講師の急病により、病氣も完治した本日に開催となったため、期待もひとしおであった。

最初に、商工部長の挨拶で、大林監督作映画「この空の花」が、さらに講師工藤さんも、ハワイのホノルルでの長岡花火の打ち上げについて取り上げるなど、花火の話題が続いた。

講演の中では、一つ目に、河井継之助と山本五十六の共通点について話された。両者を「日本が国難にあるときに、二人とも彗星のように現れた才能」とまとめ、「明治維新で日本がもう本場にどうしてよいかわからないときに、先の先を読んで、いわばスイスのような中立の藩ができないか、と思ったのが河井継之助であり、山本五十六も第二次大戦で、もう日本が戦争をせざるを得ないところまで追い込まれたとき、彼の才能が不本意な



「継之助記念館 開館5周年」  
二つ目に、五十六の妻も、従来の作品では良い評価をされてこなかったとし、「名譽挽回の為に五十六の伝記を書いた。今度は河井継之助を書きたい」と言っておられた。

ら開花した」と言っておられた。二つ目に、五十六の妻も、従来の作品では良い評価をされてこなかったとし、「名譽挽回の為に五十六の伝記を書いた。今度は河井継之助を書きたい」と言っておられた。

なって、北海道に移住なさったといえ生きていた。この生涯河井継之助という存在を引きずって生きた人生とはどんなものか、今後調べて作品を書こうと思っている。最近札幌に河井継之助の妻・母の新材料が出たこともあり、何とか作品にしたい」と意欲を見せられた。

最後に、五十六の伝記制作秘話を披露していただいた。決定版といわれる山本五十六の小説では、禮子夫人が悪妻で書かれ、不満を感じたという。そこで真相を探るべく、写真を会津まで探しに行ったところ、掛け値なしに美人だった事がわかった。さらに、九十五歳の妹さんから禮子夫人のお話を聞

くことができたという。それによると、禮子夫人の父が危篤のとき、五十六は芸者さんと熱愛中で、ほとんど家庭を顧みなかった時期とされている。しかし実際は、知らせを受けた五十六は、一晩で、禮子夫人の兄弟九人全員に手紙を書いた。その手紙を受取った兄弟は皆「あの忙しい山本のお兄様が手紙を書いて知らせてくるとは、父が相当悪いに違いない」と考え、地方から全員駆けつけ、父の死に目に全員間に合えた。もし、五十六が禮子夫人を愛していなかったなら、自分の妻の兄弟のためそれまでのことはしない、と言っておられたという。このほか五十六の映画化にあ

●編集後記

今年も『歴史館めぐり』（スタンプラリー）が四月から始まりました。来館される多くの方に「河井さん、もっとPR出来たらいいね」、「落ち着く所ですね」と言葉掛けられます。そのなかでも、この夏多かつたのは「長岡ってこんなに暑いのか?」でした。県外からの方は雪国・越後長岡「涼しい所」というイメージがあるらしく、そんなお客様の期待を裏切り暑い夏は続き、気が付けば一気に肌寒くなりいつの日か空から白いものが降ってくる。お客様に今度聞かれるのは消雪パイプの茶色かなと思っています。歴史館めぐりは十二月九日まで、長岡の歴史に触れながら館を回られて私達が気づかない発見話を聞かせて下さるのを楽しみにしています。(伊佐)

河井継之助記念館 友の会について

会員の交流や情報交換を通して継之助について親しみ、学び、記念館を応援する会です。

●会員数/正会員: 538名/協賛会員: 54名 (10/31現在) **会員募集中**

●特典/①友の会会報「峠」配付  
②会員との交流 ③催事案内・参加 ④研修旅行への案内・参加

●入会手続き

- ①申込書に会費を添えて、事務局へ持参。  
②申込書を事務局へ送り(郵送、FAX)、会費は銀行振込または郵便振込で納入。(手数料は本人負担となります)

●年会費 ※会計年度は3月31日まで

- ①正会員/ア)小・中学生:500円 (イ)高校生以上:2千円  
②協賛会員/一口5千円(法人の他、個人でも可)

●口座について

加入者名/	口座番号/
河井継之助記念館友の会	郵便局 00560-9-96432
	長岡信用金庫本店営業部 普1032829
	北越銀行本店 普1764663
	大光銀行本店 普3011256
	第四銀行長岡営業部 普1560562

※郵便局の場合は手数料無料の払込用紙が事務局にありますのでご利用ください。

●友の会事務局/河井継之助記念館

友の会ホームページアドレス <http://tsuginosuke.net/>

新入会員ご紹介

(平成24年4月1日~10月31日現在)

安達 トク	新潟県長岡市	瀬尾 憲司	新潟県新潟市	樋口 玲子	新潟県長岡市
安達 道子	新潟県長岡市	高綱 義朗	新潟県長岡市	星野 明義	埼玉県加須市
石塚 重喜	新潟県柏崎市	高柳 吟音	新潟県長岡市	増川 信一	新潟県長岡市
石原 健治	新潟県長岡市	高野 久一	新潟県長岡市	丸山 昇一	新潟県長岡市
今西十耀治	石川県白山市	高橋 利幸	新潟県長岡市	丸山 吉一	埼玉県加須市
江口 行保	新潟県長岡市	谷 将司	新潟県長岡市	南 マサイ	新潟県十日町市
大宮 貫一	新潟県長岡市	土田 莊吉	新潟県長岡市	目黒 信	埼玉県川口市
笠倉 和重	埼玉県富士見市	土田 幸雄	新潟県長岡市	元井 茂	栃木県栃木市
金子 正孝	新潟県新潟市	富居 順子	新潟県長岡市	吉田 文義	東京都練馬区
坂口 正治	福島県いわき市	外山 東	新潟県魚沼市	和田 良栄	新潟県長岡市
澤田 正彦	新潟県長岡市	布川 博子	新潟県三島郡		
地引 永安	新潟県長岡市	廣川幸太郎	新潟県長岡市		

以上34名 (アイウエオ順・敬称略)

編集人・稲川明雄 高柳吟音 布川博子  
伊佐春美 神保智子 西川里美  
星野江利子  
会報委員・猪本爾六 龍澤 学 松山賢二  
構成 月刊マンスキップ編集部  
印刷 高遠印刷株式会社